

平和福祉而心忠恕之

学校法人昌平黌 理事長

儒学文化研究所 所 長

田 久 孝 翁

世界の平和と福祉ニーズに応えることを、今年のキーワードとして取り上げました。

少子・高齢化の世代は単に日本だけの問題に止まらず、先進国を始め途上国間に於いてもこのアンバランスの傾向が進めば進む程世界の平和が脅かされ、一方福祉社会の充実が求められているのが今世紀の重要な課題であります。

子曰く、仁義礼知の精神に代表される「仁」とは、と言う問いに応じて、曾子曰く忠恕の心、忠とはあくまで己の心に忠実であること、恕は他人を思いやる心、而して、仁徳、仁義、仁政、仁教の全ては、「有教無類」教え在りて類無しと言うものであり、生まれたままの人間は誰でも平等であり、能力に大差はないものと言うのが、一口に言って孔子の教えと言うことであります。

従ってこの忠恕の心とは、永年に亘り論語を舞台として培われてきた孔子師徒によって練り上げられてきた言葉（語源）であるということが理解できる筈であります。一言加えておくならば、「忠恕」と言う言葉そのものが余りにも完結であると言うことであります。由に完結過ぎて悪用されることがあります。例えば忠義、忠君愛国等はそのいい例であります。忠とは己の為ではなくて、君主や国家王侯貴族に仕える者のためにあるかの如く利用されてきました。中でも中国や日本、韓国等に於いても、その時その時代によって使い分けられてきたきらいがありますが、過ぎたるは及ばざるが如くであると言ってしまえばそれまでのことでありますが、その背景には、文化と文明の違いがあげられます。その意味で文化は真実の積み上げであり、文明は物と心を使い分ける、即ち物質文明か精神文明か、何れかが時の流れに優先するか、即ち文明開化と言うことでありますが、果たして文化と文明とは余程縁の遠いものとなりつつあるのが現代文明の実体ではないでしょうか。言い換えれば、核戦力・大量化学兵器破壊防止に係わる先制攻撃等々全てが、文明開化、物心両面での競争心理の所産であると言って過言ではありません。そこで文化人ですが、我々人間は何のために、何を学んできたのかと言うことであります。温故と知新、21世紀は正に温故と知新の所産であり、善悪二道何れを取るかは即ち「学びて是を習う」而して人道、人の道であることは明々白々の事実であります。これを一国の国益により破壊されるとしたならば何をか言はん「戦争経済」利権地獄の最たるものに過ぎません。それが前述の文化と文明の違いであります。

百歩譲ってそれが二〇世紀の総括として戦争経済を繰り返した温故の歴史としたときに、孔子の紀元前五〇〇年「経世済民」世を経し民を済えと言っている今日で言う「平和経済学」であり、正に温故知新を地で行く世紀が二一世紀（平和と福祉）であるとは言えないでしょうか。

更にここで忠恕について一言付け加えることは、忠とは己の心に忠実であること、嘘を言わない真心であり、恕とは他を思いやる懐の広さ、この他を思いやる心と、己を偽らざる真心とが相俟って初めて世の為人の為になることができます。是れ即ち「平和と福祉」世界中の人々が望んで止まない真理であります。そこに加えて「平和経済学」即ち「経世済民」世を経し民を済えと云うことは、政治経済学の基本であることを思うとき、正に二五五五年の歳月は夢の如くであり、論語は世界の文学として今日尚も生き続ける哲理の法則であると云うことができます。